

## 本シンポジウムの趣旨説明とフセイン・バシール氏の基調講演にあたって

河合 望

このシンポジウムを行う趣旨について説明させていただきます。まず最初に、博物館の定義について考えてみましょう。今日のシンポジウムでは無形文化財は扱わないのですが、博物館というのは有形、無形を問わず、人間の生活及び環境に関する資料やその情報を収集し、保存し、資料や博物館に関する調査・研究を行い、展示や教育活動によってその成果を示す場所であります。そして、同時に人々に学びの場、あるいは楽しみ、少しエンターテインメントの場としての要素があるかと思えます。

実はこの博物館は、今日エジプトから参加されているフセイン・バシールさんがお勤めになっているアレクサンドリア図書館と関係があります。現在バシールさんがお勤めになられている図書館は新しく建設された図書館ですが、古代のアレクサンドリア図書館というのは「ムセイオン」と言いました。この「ムセイオン」はミュージアムの語源なのです。「ムセイオン」というのは、古代ギリシアのミューズという女神、学芸の神様なのですけれども、この神様を祀る神殿を意味したのです。それが知識の宝庫ということで、博物館だけではなくて図書館とか、いろいろな学術の中心地ということになり、特にアレクサンドリアの「ムセイオン」が当時のギリシア、ローマなどの地中海世界の知の中心地として位置づけられ、周辺の国々から多くの学者や学生がエジプトのアレクサンドリアに留学にきていたのです。

エジプト文明あるいはメソポタミア文明が約三千年かけて作り出した学問や科学が、当時のギリシアやローマの人々の知恵の、あるいは科学の源泉だったのです。ですからわざわざエジプトにやってくる、留学して学んで、そして母国に帰って色々な学術を広めていったのです。その「ムセイオン」から博物館が発展していったわけなのですが、ただその後いわゆる貴族の骨董収集趣味とか、珍品を集めるような、それから珍品を集めて陳列するようなことだとか、貴族の趣味でいわゆる「驚異の部屋」を邸宅に作って、人々を招いて、そこでパーティを行って、こんな面白い珍しいものがあるという好古趣味的なものがヨーロッパで流行しました。考古遺物だけではなくて、世界中のいろいろな珍しい動物の剥製だとか、それから植物、昆虫、化石などの標本なども展示するようなことから始まっていて、そういった個人趣味的な陳列からようやく公開するようになったのが、現在のオックスフォード大学にあるアシュモレアン博物館であり、それが、元々のそういった博物館の起源なのですけれども、伝統的な博物館というのは、例えば考古学の博物館では、発掘したものを展示して、特にその展示物がどういった意味があるのかとか、もちろんラベルやパネルなどに書いてあったりするわけなのですけれども、元々こういったものが出土した、あるいは発見された場所の意味というのはあまり分からなくなってしまう。本来遺物が出土した場所と生き別れになってしまう。文脈がわからなくなってしまうわけです。考古学者が発掘した遺物が博物館に入ってしまうと、大抵の場合は、その本来の文脈というものが分からなくなってしまうわけです。「博物館行き」という言葉を皆さん聞いたことがあると思いますけれども、これは「博物館行き」だということはすなわちそれはものの終焉を意味するわけです。また同時に博物館というのが時間を越えた「もの」の貯蔵庫という意味合いがあったわけです。

これはネガティブな側面で、もちろん博物館に収集されることによってある遺物が、いろいろな種類のもものが集められたりしてそれが分類されたり、遺物が体系的に研究されたりということがあったりするわけなのですけれども、これまでの伝統的な博物館というのはなかなか本来の文脈が理解されない骨董の陳列室であったり、あるいは地域コミュニティーとあまり関わりがないような状態であったということがあるわけです。そういった反省からサイトミュージアム、遺跡ミュージアムなどが生

まれてきました。遺跡を丸ごと屋根で覆って博物館にしてしまうとか、あるいは遺跡にビジュアルセンターみたいなものが作られてそこに展示するというような試みがなされています。

例えば有名な場所ですと、青森に三内丸山遺跡という縄文時代の集落遺跡がありますけれども、その三内丸山遺跡を公園化してそこに展示室を設けるなど、そういった試みがいろいろな形で発展しているわけです。そこで、実際にそういった試みに携わっている専門家に一堂に集まっていただいて、博物館を通じた文化遺産の発信の可能性をもっと考えてみようということ为本日のシンポジウムを提案いたしました。こうした博物館の業務や文化遺産の活用実際に携わっている方々からご発表いただいて、最後にディスカッションという形で進めていきたいと思ひます。これが本日のシンポジウムの趣旨であります。

それでは続いて、本日の基調講演としてエジプトのアレクサンドリア図書館所属考古学博物館館長のフセイン・バシールさんにご発表いただきます。まず、フセイン・バシールさんのご発表の前に、私のほうからフセイン・バシール博士の略歴を簡単にご紹介させていただきたいと思ひます。フセインさんは一昨日の夜に日本に到着されて、日本にいらっしゃるの、昨年富山の県立美術館で「黄金のファラオと大ピラミッド展」というエジプト展が開催されていりました。彼は、そちらの展示のアテンドのために富山にいらっしたのですけれども、今回は北陸新幹線でさらにその先の終点の金沢まで足を伸ばしていただいて来ていただきました。

彼は1994年にカイロ大学の考古学部を卒業しまして、そのあとギザ遺跡の査察官として勤務されていまして、そのギザ遺跡の査察官を終えたあと、2003年よりアメリカのジョンズホプキンス大学に留学され、2009年に博士号を取得されました。エジプトに帰国後は、大エジプト博物館のプロジェクトの統括を務められ、再びアメリカに短期間戻られてアリゾナ大学の訪問研究員として研究を続けられました。そしてエジプトに帰国した後は、ギザ遺跡のダイレクターなどを歴任して、現在アレクサンドリア図書館附属考古学博物館館長になっておられます。

彼は英語の著作、あるいは論文、あるいはアラビア語の論文等多数出版されています。またメディア等にも頻繁に出演されています。今日はご多忙にも関わらず、金沢で発表していただくことになりました。